

南京事件 「虐殺二十万人」は全くの虚構

最後に南京事件について話させて戴きます。南京城内はそれほど広くはないのです。大体鎌倉市か大田区くらいの広さです。この南京の真ん中に国際安全区（難民区）といって、アメリカ人七人、イギリス人五人、ドイツ人二人、デンマーク人一人の計十五人の外国人が国際安全区委員会を設けて、ここを市民の避難場所として管理していました。

十二月七日、八日の二日間に、南京にいた蒋介石や何応欣將軍ら政府と軍首脳は全部逃げてしまいます。十二月九日に松井軍司令官は唐生智將軍に「ここを明け渡しなさい。ここには女子供もいるだろうし、外国施設も沢山あるから、平和に開城したらどうか。」とビラを散布して降伏を勧告します。十日の正午まで待ちましたが、唐生智からは返事がありません。そこで十一日から総攻撃が開始され、昭和十二年十二月十二日に南京城の一角が崩れます。十三日に中華門や光華門、中山門が破れます。守城していた中国軍は一斉に下関方面に逃げます。

その前に十二月一日、馬南京市長が市民に布告します。「南京城はいよいよ危ないから、出られるものは出なさい、残る市民はすべて安全区に入りなさい」と。お金持ちは出られますが、逃げる車もない者は残ります。その数を松井大將は十二、三万人と言っていますが、記録では二十万人となっています。馬市長はその時、安全区を管理している国際安全区委員の十五人に残留市民の食糧である米・麦・塩・現金を預け、巡查を何人か残して自分も逃げます。かくして市民はすべて安全区内に移住して食糧の配給を受けます。ここには金陵大学とか、日本を始め各国の領事館や裁判所、病院などもある官庁街です。このような状況下に日本軍は入城するのです。

シナの敗残兵は、便衣兵（つまり軍服・軍靴を脱いで、市民の服を剥ぎ取って平常服に着替えたゲリラ兵）になって、この安全区内に逃げ込みます。七、八千人は遁入したであろうと言われています。唐生智は兵隊が勝手に逃亡しないように城門を塞いでしまいました。ですから逃げる兵隊は巻脚絆とか上着をつないで城の外から飛び降りたらしく、この時のパニックで二、三百人の死体があったと言います。この北方の揚子江への出口（下関）を佐々木支隊が包囲して機関銃を乱射します。沢山の敗残兵が死にます。この死体が沢山あったので、後に大虐殺の噂の一つになったと言われています。しかしこれは戦闘行為です。逃げる兵隊を撃つのは当たり前です。

揚子江の第三艦隊が十三日に入ってきて、こちらからも撃ちますので、完全に敗残兵は挟み撃ちになったわけです。

松井大将は占領するとすぐに安全区の各出入口に歩哨を立てさせて、無用の者の出入りを禁じ、銃撃や砲撃をしてはいけないと厳命しました。文字通り「安全区」としたのです。ただしこの中に入り込んだ便衣兵は引っ張りだして処刑しました。これはゲリラですから、処刑することは国際法的にも合法です。きちんと制服・制帽を着用して武器を隠さずに持って、指揮者がいるのを軍隊と言いつつ、これは降伏する権利を持っています。しかし民間の衣服を着て、手榴弾やピストルを隠し持って、隙をみては撃ってくる便衣兵は、即時射殺しても構わないのです。日本軍もこの便衣兵に多数やられています。この安全区に入った便衣兵の二、三千人が引っ張りだされ、揚子江岸で処刑されています。これは虐殺でも非合法でもありません。国際法上の正当な処罰です。

安全区には婦女子を含めて市民約二十万人がおりましたが、十二月十三日から翌年二月九日まで、この安全区の国際委員たちは、自動車で全市を走り回り、あるいは中国人青年を使って情報を集め、日本軍がどのような悪い事をしていくかを記録して、毎日日本の外務省にその情報を通知して取り締まってくれと要求しました。

その情報の集計は、日本軍による殺人は四十九件、傷害事件四十四件であります。それも噂を交えての記録です。つまり、戦争中の敵の首都である南京での不当な殺人は、最大でも四十九人以下であるという証拠です。

更に一月中旬には南京の人口は二十五万に増えています。そして二月には治安も安定しましたので、皆自分の家に帰りたく、安全区も解散になります。この段階で「安全区では火事が一件もなかった、鉄砲も撃たれなかった、爆撃も砲撃もなかった。至極安全でした。有難うございました。」という感謝状を、安全区国際委員長の手紙が日本軍に提示しているのです。

同盟通信の本部はこの安全区にありました。のちにプレスセンターの会長もされた前田雄二氏は「我々は常にここに数名の記者と共に常駐していた。もし殺人があったらすぐにかけて写真も撮り、記事にもしました。しかしそんなことは一つも有りませんでした。」と証言しています。

南京では逃げ込んだ兵隊は別にしまして、市民はまったく安全だったのです。

きりがありませんのでこの辺でやめますが、南京で大虐殺があったというのは完全なデマゴグなのです。シ

ナ人得意の白髪三千丈式の宣伝なのです。作り話なのです。外国人記者も含めて百五十人程のプレスマンが南京市内で取材に当たっておりましたが、誰一人として虐殺を見ていないのです。評論家の阿羅健一さんが調べたのですが、その時南京で取材した知識人の中には林芙美子、石川達三、西条八十、草野心平、大宅壮一といった有名な方々がいますが、これらの人たちも、見たことも聞いたこともないと言っています。東京裁判で南京に大虐殺があったと聞いてびっくりしたというのが多くの人たちの所感です。このことを阿羅さんは『聞き書き南京事件』の中で詳しく書いています。

朝日新聞の記者が南京戦で一人亡くなっていますが、命懸けで取材したのでしょう。読売も毎日も報道していますが、当時朝日が一番詳しく、十二月十三日から三十一日までの間に五回に渡って朝日は写真特集をしているのです。日本軍が入った一週間後の写真を見ると実に平和な光景、日支親善風景が写し出されています。畑を耕している光景、街中で散髪している光景、少女が集まって賛美歌を歌っている光景、日本の兵隊が中国人の子供と遊ぶ光景、乳の出ない母親にミルクをあげている光景、シナ人捕虜に給食したり看病したりしている光景等々です。プレスマンたちは虐殺など見ていないのです。虐殺などないのでから見るとありませぬ。実にのどかな日支親善のありさまが写し出されています。

戦争に負けて、昭和四十六年ころから朝日新聞は掌を返したように、「南京に大虐殺があったーあったー」とでたらめを書き続けます。朝日新聞は本多勝一記者の『中国の旅』を四十日間連載しますが、その内容は全部中国側の宣伝通りに、中国人が言った通りに書いています。そのウラを取るとか、証拠を求めるとか、日本側の証言を照らし合わせるとかはしないで、ただ中共のプロパガンダの言うがままに、日本軍の悪虐ぶりを「これでもか、これでもか」と言わんばかりに書きつづったのです。これによって日本人も本当にこんなことがあったのかと信じこまされてしまい、教科書にも載るようになったのです。（南京虐殺の虚構については、拙著「南京事件の総括」（展転社）にて、より詳しく述べてありますので、ぜひ、参照下さい。）